

*Texts Together with Richard The Redeless* 2 vols, Oxford U.P., 1886

- 2) Pearsall, Derek (ed.), *Piers Plouman by William Langland*, Edward Arnold, 1978
- 3) 柴田忠作訳「農夫ピアースの夢」東海大学出版会、1981

#### 参考文献

- 1) Blanch, Robert J. (ed.), *Style and Symbolism in 'Piers Plowman'*, U.S.A, 1969
- 2) Hussey, S.S. (ed.), *Piers Plowman; Critical Approaches*, London, 1969
- 3) Martin, Priscilla, *Piers Plowman*, London, 1979
- 4) Hert, Greta, *Piers Plowman and Contemporary Religious Thought*, London, 1977
- 5) MacQueen, John, *Allegory*, London, 1970
- 6) Cawley, A.C. (ed.), *Everyman and Medieval Miracle Plays*, London, 1956
- 7) Southern, Richard, *The Medieval Theatre in the Round*, London, 1957
- 8) Bevington, David, *Medieval Drama*, U.S.A, 1975
- 9) Craig, Hardin, *English Religious Drama*, Oxford U.P., 1955

(本学助教授)

し、また、「死」を恐れる「生命」は、ウィリアムを通じて、我々読者一人一人の姿ともなる。演劇における登場人物の実際の姿を見たり、plateaの助けを借りずとも、明確な性格づけと割り切った描き方に失敗したアレゴリーの人物たちと、彼等達の不完全さをウィリアムが照らし出すことによって、アレゴリーの人物達が生き生きと描き出されている。

夢という形式を用いて、時間や空間の制約を取り払い、アレゴリーが自由に歩き回れる空間ができたのではあるが、その夢の中でさえ、ウィリアムや「良心」にとって、耐えられない現実があった、というところに、当時の教会や、教会関係者への批判を描いたといわれる、ラングランドの真の意図が、また絶望、そして救いを求める叫びがあったのではないだろうか。

(完)

(注)

- 1) A.G. Mitchellは*Lady Meed and the Art of 'Piers Plowman'* (*Style and Symbolism in 'Piers Plowman'*)の中で、Lady Meedの家系の二重構造について述べ、父親がWrongではあるが、母親がAmendsであるため、Meedは道徳的に中立であると論じているが、「平和」と「悪」の裁判の件から考えても、又、「良心」が最終的に結婚を同意しない筋書きからも、Meedが‘evil doers’の一人であることは、間違いないと思われる。
- 2) Jenkins, Priscilla, *Conscience: the Frustration of Allegory*, in *Piers Plowman, Critical Approaches*, ed. S.S. Hussey, London, 1969.
- 3) Davis Millsは*The Role of the Dreamer in Piers Plowman*, in *Piers Plowman, Critical Approaches*.の中で、巡礼の話のポイントは、意味を支えるイメージが、全く不適切な使われ方をしていることであり、その空間的広がり、俗世的概念は、ピアスの主な統一をばかしてしまうと述べている。
- 4) W.W. Skeat, *The Vision of William Concerning Piers Plowman*, vol 1, B text, passus x, ll. 372~4.
- 5) W.W. Skeat, vol 2, p. 257
- 6) W.W. Skeat, vol 2, p. 253
- 7) W.W. Skeat, vol 2, p. 200
- 8) *Everyman*, l. 86. in *Everyman and Medieval Miracle Plays*, ed. A.C. Cawley, London, 1956
- 9) *Everyman*, l. 796
- 10) *Everyman*, ll. 823~825
- 11) Richard Southern, *The Medieval Theatre in the Round*, London, 1957

テキスト

- 1) Skeat, W.W. (ed.), *The Vision of William Concerning Piers the Plowman in Three Parallel*

‘Lechery’を支配する‘Flesh’「肉体」のやぐらがある。登場人物は、このやぐらや城を往来するのであるが、観客はといえば、Richard Southernの言うように<sup>9)</sup>、そのやぐらとやぐらの間の堀を作った後の土盛りの上に座っているか、中央の区域、もしくは、Plateaの一部にいる。Macro Manuscriptに添えられた、ステージプランによると、登場人物たちが、ひとつのやぐらから別のやぐらへ移動する時に、観客をかき分けて、道を作る案内人‘stytelerys’がいたことがわかる。又、中央の城で主要な演技が行なわれたようで、そこには誰も座ってはいけなと書かれている。

このように、演劇を演じる役者と観客は、同じ土俵の上に存在したわけで、役者が演じる世界を小宇宙とするなら、観客はその小宇宙の中で、舞台の人物と同化することができたのである。舞台での現実とは、即、観客の現実でありえたのである。

## (VI)

このように、演劇の中で得られる一体感は、舞台設定と、観客の目の前の登場人物の存在のためである。演じる側と、見る側が、同じ空間に属し、抽象的概念が人間の姿をしたものでさえ、実際に、主人公と言葉をかわし、それぞれの動作をするのを、少しも不思議に思わない。これは、演じる側と見る側が、生きた人間であるためで、いくら、抽象的概念の名前をもつ人物であろうと、そこには生の生き生きとした息吹きがある。役者がどんなにその役になりきろうとしても、性格描写が単純であるだけ、どこかしら作りものめいた雰囲気を持たせざるを得ないのだが、むしろ、そこに、演じる側と見る側との間に暗黙の了解が成り立っていると考えられ、不完全なものを不完全なものとして、そのままとらえようとする、観客側の積極的な姿勢がみられるのである。

「農夫ピアスの夢」は、物語詩であるため、登場人物のアレゴリーは、演劇の中のものに比べて、はるかに、生命感、現実感に劣っていると考えられるのだが、実際には、生身の姿を見せなくとも、非常に現実的な、生き生きとした感銘を読者に伝えてくれる。これは、先に述べた、ウィリアムが、夢の中でさえ、現実をはっきりと見せる役割をしていることと、覚醒時と、夢のなかのウィリアムが重なってしまうことで、読者が夢の世界へ容易に入りこめ、現実と夢の区別を、とり払ってしまうためであると考えられる。ウィリアムの役割が、非常にあいまいであることと、夢の中のアレゴリーが、不統一で、不十分な描かれ方をしていることは、今まで良く指摘され、批判されていたが、逆に、そのような欠陥があるために、アレゴリーの人物達が、演劇の中におけるもののような、人間臭さと、現実味を帯びてくるのである。ウィリアムの目を通せば、「学識」も、当時実際に存在した学者の姿となるだろう

提案しているし、次に司祭のところへ行き、終油の秘蹟を受けるよう忠告する。「美」は、墓まで同道するが、「万人」がいざ足を踏み入れる段になって、‘And what, should I smother here?’<sup>8)</sup>と驚き、彼から去って行くし、また‘Strength’「力」も、‘Thou art but a fool to complain; you spend your speech and waste your brain. Go thrust thee into the ground!’と残酷にも「万人」を振り切っている。このような、非常にはっきりとした意味を持ち、明快に行動をする人物たちは、「万人」が「死」に致り、やがて、魂が体から離れ、彼が生前に行った善行故に、天へと昇るという筋書きを仕上げるための大事な脇役なのである。ここでの「万人」はアレゴリー化された脇役に、何の疑問も抱かずに、当然のものとして受け入れている。というよりは、「万人」が裏切られることで、人間が本来持っているはずの資質が、人間の魂の救済の為には、何の意味も持たず、人間の究極の目標が、富や力、美や知識といった現実的な価値と、別なものであるということをはっきりと教えているのである。

「死」が「万人」を訪れ、「万人」が墓へ身を横たえるまでの舞台上の出来事は、決して、夢の中の推移ではない。現実の人間一般を表わす主人公が、「友人」や「親類」に助けを求める姿は、観客一人一人の姿でもあるのだから、現実にはありえない抽象的概念の人物達との出会いや会話は、少しも不自然で、非現実的なものと思われたい。一つには、古い時代から、神話的アレゴリーや、聖書の中のアレゴリーに、人々がなじんできたことによると考えられるが、演劇という特性の中に、その主な理由が見出されるように思われる。舞台上では、現実の空間や時間を超越した世界が、繰り広げられ、それが、あたかも見ている私達の身近な出来事のように感じられる。夢と現実が一体となった架空のものと、現実的なものが、混ざり合って、尚かつ、現実がはっきりとした姿で私達の前に現われて、私達の目に新鮮な驚きと写るのである。

このようなことは、*The Castle of Perseverance*においても同様である。この劇は、*Everyman*と違って、一つの劇の中に、悪と徳との人間の魂の奪い合いや、死の来訪、魂と肉体の問答等、後の道徳劇がとり扱う、ほとんどの要素を含む壮大なものであるが、ここでも主人公は、*Humanun Genus* (Mankind) で、人間一般を表わすのである。

「農夫ピアスの夢」の中に出てくる七大罪悪は、ここでは七つの主要徳と対比されて、同じように、アレゴリーで描かれているし、また、城を攻撃するパターンもよく似ている。しかし、この作品で注目すべき点は、その舞台の構造である。まず、大きなPlateaと呼ばれる広場があり、その周囲に、いくつかのやぐらが配置されていて、広場の中央に、「堅忍の城」がある。西のやぐらには‘World’、北には、‘Pride’‘Wrath’‘Envy’を監督する‘Devil’「悪魔」が、北東には‘Covetousness’「貧欲」が、東には神のやぐらが、又、南には‘Gluttony’‘Sloth’

又、B Passus xiii 231行目の‘Farten, ne fythelen • at festes, ne harpen,’では、ラングランドが、The coventry Mysteriesを見たことに間違いはなく、ここで、そのことに言及しているのだと、Skeatは断言している<sup>7)</sup>。

このように、当時の視覚的芸術の一つであった聖史劇と夢物語は、決して別々に存在したものではなく、互いに影響しあうものであった。むしろ、キリスト教の教義を流布するための試みと、人々の娯楽が一体となった演劇も、又、その教義を深く掘り下げようとする詩においても、キリスト教の中の数々の理念が、人の姿を借りて現れ、行動するという非現実性は、少しのためらいもなく、人々に受け入れられていたというべきかもしれない。

しかし、「農夫ピアスの夢」の中に出てくるアレゴリーは、当時より大いに流行していた、Corpus-Christi-Playsよりは、Morality Playsに多く見られる。残存している道德劇で、一番古い、*The Castle of Perseverance*は、15世紀初期のものであるが、Wiclifの、*De Officio Pastoral*: (1378年)の英語版に、ヨーク市のPater Noster Playのことが言及されていて、そこに、後の道德劇と同様の、悪と徳が擬人化されていることが明らかにされているし、又、12世紀のキリストの降臨劇、*Antichristus*にも、既にアレゴリーで表わされた人物が登場していることがわかっている。これらのことから、「農夫ピアスの夢」の中のアレゴリーは、演劇におけるアレゴリーと同質のものであったことは確かであろう。「ピアスの夢」は、物語詩であって、演劇ではないのであるが、この演劇の中のアレゴリーと比較することで、この詩におけるウィリアムの役割をもっと、明確にすることができるのではないだろうか。道德劇の*Everyman*と*The Castle of Perseverance*をとりあげて考察してみたい。

まず、考えられるのは、演劇には、「ピアスの夢」のウィリアムの役割に当たる人物は必要ないということである。例えば、*Everyman*では、‘Death’「死神」の来訪を受け、恐れ、とまどい、助けを求めるのは、主人公*Everyman*「万人」自身である。彼がこれからたどらざるを得ない「長い旅」は、「死」へと向ってはいるけれど、究極には、神へ致る道程でもある。俗世界の富と、偽善、悪徳にまみれながらも、‘Thus Gaily’<sup>7)</sup>に生活していた「万人」が、死への恐怖から、道連れを探すことで、この世の真の姿を発見し、神を見出し、人間がこの世で取るべき道を教えている。「万人」が会うことになる人物は、Fellowship「友人」、‘Kindred’「親類」、‘Goods’「富」、‘Good Deeds’「善行」、‘Knowledge’「知識」、‘Confession’「告解」、‘Beauty’「美」等と多彩であるが、このアレゴリーは、あくまでも「万人」個人の資質を表わすか、さもなければ、それに関係した人物達である。これらの人物は、アレゴリー化された人物として、その固有な性格をそのまま表現している。「善行」と同様、その妹「知識」も「万人」を助ける人物であるが、彼女は「万人」に会うと、早速、「告解」のところへ行くように

## (V)

John MacQueenは*Allegory*の中で、‘It is quite wrong to think of allegory as necessarily verbal; throughout the Middle Ages and Renaissance the visual as well as the verbal arts become vehicles for allegory, both biblical and classical.’と述べ、中世で、他の分野、特に視覚による分野にも、アレゴリーが浸透していることを指摘している。絵画と並んで、演劇は、その代表的なものであるが、「農夫ピアスの夢」にも、当時流行していた劇に関すると思われる箇所が、いくつかある。

例えば、テキストのPassus xviii 283行目の‘Ragamoffyn’という名前は、古い聖史劇にでくくる悪魔の名で、このような奇妙な名は、その演劇の中では、悪魔は喜劇的役割を演じているためであるという<sup>5)</sup>。又、B Passus xviii 114行目で、‘Mercy’「慈悲」という名の乙女が、西の方角から歩いてきて、地獄の方を見る（‘to-helle-ward she looked’）という所がある。Passus Iの14行目で、西方に死神の住まいがある、と書いてあるのと矛盾しているが、Skeatは、これを聖史劇の位置関係に根ざしているものとして、次のように述べている<sup>6)</sup>。

Now this is expressly contrary to the description in Pass. i. 16, where the abode of Death is in the West; see note to Pass. i. 14. I explain it thus. The scenes are quite different; and the reference is, not to the Eastern and Western quarters of the world, but to the Eastern and Western ends of the space on which the actors moved in the Mysteries. This will readily suggest that whilst, in the Mystery of the Creation, it would be convenient and appropriate to place the throne of God in the East, it would be equally convenient (appropriateness not being considered) to represent Christ’s triumph over Satan in the same position. The reason for it was that the same wooden platform, of which the upper stage supported the divine throne, served, in its lowest or lower stage, as a place of resort for the demons. A well-made platform had three stages or stories, the upmost representing heaven, the middle one the world, whilst the lowest, more or less concealed by curtains, served as a ‘green-room’ for actors, and for the resort of the demons. A hole in the side of this lowest stage was called the mouth of hell, out of which fire and smoke sometimes issued, mingled with the cries of the lost.

And rode so to Reuel • a ryche place and a merye;  
 The companye of conforte • men cleped it sumtyme.  
 And Elde anone after me • and ouer myne heed zede,  
 And made me balled bifore • and bare on the croune,  
 So harde he zede ouer myn hed • it wil be seen eure.  
 'Sire euel-ytau3te Elde,'quod I • 'vnhende go with the!  
 Sith whanne was the way • ouer mennes hedes?  
 Haddestow be hende,'quod I • 'thow woldest haue asked leue!  
 '3e! leue lordeyne!'quod he • and leyde on me with age,  
 And hitte me vnder the ere • vnethe may ich here;  
 He buffeted me aboute the mouthe • and bette out my tethe,  
 And gyued me in goutes • I may nou3te go at large.

(B xx 175~191)

「老齡」から逃げようとしている「生命」は実は、ここでは主人公を含むこの世の人間一般を表わすもので、主人公ウィリアムは、「生命」の代わりに、一般の人々が受けるはずの「老齡」や'Deth'「死」の攻撃や、それに伴う恐怖を経験するのである。主人公は、激しく痛めつけられ、「自然」に助けを求めると、「自然」は、「統一」(教会)へ行くよう命じる。「統一」にたどりついて後の物語の主人公は、そこの守り手であり「良心」であって、ウィリアムはもうでてこない。現世の一般的人間を表わす彼の役割は、ここまでで終わっている。農夫ピアスを求めて巡礼の旅に出るのは、ウィリアムではなくて、「良心」なのである。初めは、一般的人間として、ただ珍しいものを見ようと、フラフラと、世間をうろついていたウィリアムは、最後には、「良心」と一体となって、究極の真理を求めて出て行くのである。

このように、ウィリアムは、現世の普通の人々として、キリスト教の教義に無知であり、疑問と、深い不安を抱いているのだが、夢の中の主人公としても、実は、この覚醒時の状態とほとんど変わっていないことがわかる。ラングランドは、夢を設定することで、現実の世界から遊離した空間を作ろうとしていたのであろうが、夢と現実を隔てる役割をもつウィリアムの性格描写と状況の描写は、わずかなもので、その姿は、夢の中のウィリアムの姿と一致してしまう。その結果、我々読者が夢の世界へ入りこみ、ウィリアム自身となって、その世界での出来事を体験している錯覚におちいるのである。

But if thei sei3e as by sy3te • somewhat to wynnynge;  
 Of gyle ne of gabbynge • gyue thei neuere tale.  
 For *spiritus prudencie* • amonge the peple, is gyle,  
 And alle tho faire vertues • as vyces thei semeth;  
 Eche man sotileth a sleight • synne forto hyde,  
 And coloureth it for a kunnyng • and a clene lyuyng.'

(B. xix. 444~455)

その理由として、次の行に、どこで食事をしたらよいかまるでわからなかったから、と書かれてはいるけれど、心も軽く勇んで教会へ出かけて行った主人公は、ここで一転して、正解を得ることのできない暗闇の世界へと、再び、放りだされてしまう。19章で、教会の中で夢を見て、夢から覚めて後、「なお道を歩む。」(B. xx. 1~2)ということは、夢を見る本人である主人公の主体が、既にあいまいになっていて、首尾一貫していないことを示している。

主人公は'Need'「困窮」に出会い、叱責を受けた後、又眠りにおちるのであるが、そこで、アンチ・クリストに襲われた「統一」を守るため、「良心」は「自然」に助けを求める。「自然」は、'……with many kene sores, As pokkes and pestilences • ……' (B. xx. ll. 96~7) と、疫病をたずさえて進み、敵をなぎ倒して行く。慈悲の心から「良心」が「自然」にしばらくの休息を求めると、'Lyf'「生命」は「良心」の忠告に耳を貸さず、勝手気ままに振るまい、'Fortune'「幸運」と一緒になり、'Sleuthe'「怠惰」をもうける。その妻'Wanhope'「自暴自棄」と共に「怠惰」は再び「良心」を襲う。今回は、「良心」は'Elde'「老齢」に命じて、敵を制圧させようとし、さすがの「生命」も、「老齢」の攻撃に、身をまもるすべもない。この「生命」の「老齢」からの逃亡を語っている時に、突然、夢を見る本人である'I'が登場する。

And Elde auntred hym on Lyf • and atte laste he hitte  
 A fisicien with a forred hood • that he fel in a palsye,  
 And there deyed that doctour • ar thre dayes after.  
 'Now I see,'seyde Lyf • 'that surgerye ne fisyke  
 May nou3te a myte auaille • to medle a3ein Elde.'  
 And in hope of his hele • gode herte he hente,



は、序章で、最初の夢を見て、更にあと7つの夢‘and sevene sythes more.’ (B. prol. 230)を見ると語っているが、その夢と夢の間に、夢から覚めて正気の時間がある。夢を見る人としての彼の言動は、その正気の時間からうかがい知ることができる。

最初は、まるで羊飼いのように、隠修道士の姿で、粗毛の服をまとい、世に出てくるのであり‘I shope me in shroudes • as I a shepe were, In habite as an heremite •’ (B. prol. 2 ~ 3) 又、7章で目覚めてみると、空腹で、一銭もお金を持っていない‘Meteless and monelees’ (B. vii. 141)。やがて又、‘Thus yrobed in russet • I romed aboute’ (B. viii. 1) と粗末な服を着て再び歩き回る。13章で目が覚めた後、‘I」私」は‘And as a freke that fre were • forth gan I walke In manere of a mendynaunt • many a 3ere after’ (B. xiii. 2 ~ 3) というように貧しい生活を送る。18章に致つても、まだ彼は‘Wolleward and wete-shoed • went I forth after As a reccheles renke • that of no wo reccheth, And 3ede forth lyke a lorel • al my fyf-tyme,……’ (B. xviii. 1 ~ 3) と相変らず、服装は粗末なものであり、13章から始まった、夢うつつの状態で、うすのろ、馬鹿のように考えこみ‘And so my witte wex and wanyed • til I a fole were,’ (B. xv. 3)、眠ることに助けを求めている。

ここまでは、ウィリアムの覚醒時における姿は統一がとれているといえる。ところが、18章で、夢の中でイエスの復活と、地獄からの脱出、そして「正義」と「平和」の仲直りを知った主人公が、心も軽く夢から覚め、希望と自信に満ちて、妻と娘に呼びかけている。そして、19章で、神を賛えるために、すっかり身づくろいをして、教会に出かけるのであるが、ミサの途中で、又眠りにおち、キリストと十字架について語る「良心」の言葉を聞く。さらにそこで、‘Grace」恩寵」が農夫ピラスと共に歩み (B. xix. 207)、アンチ・クリストに対抗すべく力を与えたにもかかわらず、「良心」を攻撃する民衆や、代理司祭‘a lewed vycory’ (B. xix. 407)の言葉は、この世の現実を次のように情け容赦なく暴き、それを聞いたウィリアムは、夢から覚め、20章の初めで、再び、心重く歩き回ることになる。

*Non occides: michi vindictam, etc.*

It semeth, by so • hym-self hadde his wille,  
That he ne reccheth rizte nou3te • of al the remenaunte.  
And Cryst of his curteisye • the cardinales saue,  
And tourne her witte to wisdom • and to wele of soule!  
For the comune,’quod this curatour • ‘counten ful litel  
The conseil of Conscience • or cardinale vertues,

混乱や墮落が始まり、「良心」はなすすべもなく、立ちすくんでしまう。彼の‘Bi Cryste,…… I wil bicom a pilgryme, And walken as wyde as al the world lasteth, To seke Piers the Plowman・’ (B. xx. ll. 378~380) という絶望の言葉は、自ら招いた結果でもあるのだ。又、「悔恨」も聴罪師に慰められて、すっかり自分を忘れてしまう。

このように、キリスト教の教義の中で、善とされている要素が、実は、非常に不完全なものであって、いかなる古典の名著からの教義をもってしても、その不充分さを補うことはできない。この絶望感は、人間が、永遠にもたざるをえないものなのであって、このリアリティーこそ、精神面における人間の不幸であり、神にそむき、原罪を犯した人類に科された罰なのである。この、夢の中の現実が、中世の人々が実際に直面していた問題であったわけで、そこから救いを求める人々の叫びは、「良心」の叫びと同様、悲痛で切実なものであったろう。人々は、絶望に、うちひしがれながらも、一筋のひかり、ピアス（イエス）を求めて、果てのない旅へと出立することになる。

このことから、ラングランドは、初めにVisioの部分で、夢と現実、理想と現実の世界を描き分け、その仲介者としてウィリアムを配置しようとしていたが、後に、Vitaの部分になってから、アレゴリーで示される人物達が、決して理想ではなく、矛盾を多くはらんだ、リアリティーをもつ人間像の一端であることに気づき、仲介者としてのウィリアムを、今度は、無知、無学ではあるが、素朴な神の求道者である、一般の人々の代表として登場させ、理想が、いかに現実と遠いものであるかを示してみせたと考えられる。

#### (IV)

ここで、もう少し、作品の中に描かれる、ウィリアムの姿を見てみたい。

彼は、夢の中の主人公として、真理を追究し、‘Do-bet’「積善行」‘Do-best’「至善行」を探求しているにもかかわらず、20章では、その夢の主人公の役割を「良心」に明け渡してしまう。この詩は、ウィリアムが、世間をさまようところから始まり、‘Went wyde in this world・wondres to here.’ (B. Prol. 4)、最後に、巡礼として再び世間をさまようところで終わっている。ところが、その主体は、初めは、詩人、つまりウィリアムであったのが、最後に巡礼に出るのは、‘I’つまり「良心」なのである。このように、夢を見る人、つまりウィリアムが、夢の中での主人公の役を全うできないのは、ラングランドが、詩的統一に失敗したためと、単純に言いきることはできない。それよりも、この主人公に与えられた役割の統一が必ずしも必要ではなかったと考える方が妥当である。

夢を見る本人としての描写は、詩全体を通じて非常に簡潔に述べられている。ウィリアム

(B. xii. ll. 232~235)

「平和」は、第4章で、‘Wrong’「悪」を議会に訴えるのであるが、「報酬嬢」が「悪」を弁護し、慈悲を求めて、「平和」に純金の贈り物をすると、「平和」は次のように「悪」を許してしまう。

And thanne gan Mede to mengen here • and mercy she bisought,  
 And profred Pees a present • al of pure golde:  
 ‘Haue this, man, of me,’ quod she • ‘to amende thi skathe,  
 For I wil wage for Wronge • he wil do so namore.’  
 Pitously Pees thanne • prayed to the kynge  
 To haue mercy on than man • that mys-did hym so ofte:  
 ‘For he hath waged me wel • as Wysdome hym tauzte,  
 And I forgyue hym that gilte • with a goode wille;  
 So that the kynge assent • I can seye no bettere;  
 For Mede hath made me amendes • I may namore axe.’

(B. iv. ll. 94~103)

又、18章では、互いに言い争っていた‘Ry3twisness’「正義」と「平和」は、イエスの復活を契機に、仲直りをする(B. xviii. ll. 418~421)。20章では、‘Unity’「統一」の城へ、「高慢」のひきいる、アンチクリストが攻めかかり、「良心」は「自然」に助けを求め、しばらくは、優位に立つのだが、「怠惰」や「強欲」の攻撃を受け、‘Ypocrisie’「偽善」との戦いで、城の中の味方、すぐれた学者が多数傷を負ってしまう場面で、城を守る門番を務める「平和」は、托鉢修道士の「おべんちゃら」を一度は拒否しておきながら‘Hende-Speche’「丁寧な言葉」の口添えで城の中へ入れてしまう。これらの例は、「平和」の特性である妥協を表わすものであり、真理を究める者の側から見ると一つの限界以外の何ものでもない。

「良心」は「報酬嬢」との結婚に関するエピソード(2章・3章)で、「理性」の支持を得て、その結婚に決して応じようとししないのは、「良心」の持つ善なる特性の故であるのだが、20章で、‘Contricioun’「悔恨」を墮落させた「おべんちゃら」を歓待し、そのきっかけを作ったのは、少しでも良い効果があることがわかれば、それを拒否することのできない特性の故なのである。「おべんちゃら」を受け入れ、「悔恨」を治療させることで、「統一」の城の中に

で自分の疑問に答えてくれる人々を訪ね歩く。出会う人々は、アレゴリーで表わされた、「聖教会」「学問」「良心」などで、彼らは、正当で適切な助言や教えを授けてくれる、理想的な人物であるように思える。しかし、詩の前半、Visioで、ウィリアムの無知を嘆いた「聖教会」は、後半、Vitaの最後で(B. xiv)、教会内部の平和さえ保つことができないし、「学識」も「良心」から見放され、その「良心」さえ、最後には、「学識」に助けを求めつつ、聖教会を去らざるを得ない。

このように、夢、つまり理想の世界で、アレゴリーによって、「こうあるべき」姿を持つ人物達の語る説教や忠告は、逆に、現実の世界での、教会やその関係者達の墮落を写し出して、理想の世界とは、相入れない様相を呈してくる。それは、いわば、夢の中のリアリティーであって、二つの種類に分類できる。

一つは、序章での隠修道士、序章、と第5章での巡礼(II. 522~525)、又13章と14章のホーキンのように、現実の世界から、そのまま夢の世界へ移行し、描かれ、皮肉られている場合である。巡礼に関しては<sup>3)</sup>、13章の宴会の場面で、「忍耐」に巡礼服姿で登場させ、学者や、「書物」「学識」等の安逸な生活や贅沢な好みと対立させて、そのあるべき姿を描いてはいるのだが、巡礼の真の目的を忘れ、印やおみやげの類を胸や帽子にぶらさげて得意がる実際に存在する人々の姿が、そのまま夢の中に登場している。(B. v. II. 522~543)。このような人々は、夢の中のウィリアムと同じレベルにいるもので、夢という設定を必ずしも必要としていない。このように、現実の世界の要素を、そのまま持ち込んだ形の、夢の中のリアリティーは、夢と現実を往来するウィリアムの役割を不鮮明にしてしまう。

もう一つの夢の中のリアリティーは、アレゴリーで描かれた人々の持つ限界である。例えば、Vitaでは、学問に対する批判をこめて、‘Wit’「知性」「Study」「研究」「Clergy」「学識」「Scripture」「書物」を登場させ、長い口上を述べさせているが、ウィリアムに‘This is a longe lessoun’, quod I • ‘and litel am I the wyser; Where Dowel is, or Dobet • derkelich 3e shewen;’<sup>4)</sup>と言わせ、善行や、積善行を求める上で、学問が、何の役にもたたないことを皮肉っているし、又別の場所で‘Imaginatyf’「想像」は、「学識」の理解できないものを‘Kynde’「自然」が知っていると次のように述べて、「学識」の限界を示している。

Lewed men many tymes • maistres thei apposen,  
Why Adam ne hiled nou3te firste • his mouth that eet the apple,  
Rather than his lykam a-low • lewed axen thus clerkes;  
Kynde knoweth whi he dede so • ac no clerke elles.

食」‘Sloth」[怠惰]の七大罪悪は、まさしく、その通りの性格を持つものとして描写されている。貧しい巡礼姿の隠修道士として登場する‘Patience」[忍耐]や、自分の知識を自慢気に披露する‘Clergy」[学識]、最終的には、すべての人々と和解し、妥協する‘Pees」[平和]、托鉢修道士の‘Flaterere」[おべんちゃら]等、自分の名の持つ意味を、そのまま体现しているのである。彼らは、いわば、架空の人物であり、現実には存在せず、夢の中の時間と空間を超えた世界に住む人々である。

主人公、Williamは、これらのアレゴリーの人物達と夢の中で出会い、疑問をぶつけ、教えや、忠告を受けたり、又登場人物間の争いを目撃したりする。時には愚かな質問をするのであるが、主人公のその無知、無邪気さが、実際には、機械的であるはずの夢の中の登場人物に大きな影響を与えているといえることができる。

Priscilla Jenkinsは、『『農夫ピアス』におけるアレゴリーは、単一なものであろうと、複合的なものであろうと、モード自体は、観念化を示すものであり、故に、単一化を表わしている。それに比して、リテラルなモードは、妥協と混乱と道德観念に対する無関心を表わし、この二つのモードの対立と共存が、この詩の主なテーマである。』と述べ、『アレゴリーのモードの役割は、リテラルなものを正すことであるが、アレゴリーの人物が、不適切で、不十分な描かれ方をしているため、アレゴリーと、リテラルなものとの衝突は、より複雑なものになっている。』と断言している。そして、又、アレゴリーの人物をきちんと描かなかったのは、意図的なもので、人間のこの世での姿を悪ときめつけて、アレゴリーのモードが示す単純な道德観念に、話を集中させるつもりではなかったと言う<sup>2)</sup>。この、「リテラル」な世界と、「アレゴリー」の世界は、ここでは、現実の社会と、理想の世界と考えられているが、ラングランドが、「アレゴリー」の世界に妥協せず、現実である「リテラル」な世界をも、きちんと直視し、並存させようとしているというJenkinsの説に賛成である。Jenkinsは、この説を例証するのに、‘Conscience」[良心]に関するエピソードをあげているが、その立場を明確にするのが、夢を見る主人公、Willeすなわち、Williamなのである。

### (III)

ウィリアムの役割は、まず第一に、現実とかけ離れた、夢と理想の世界を作ることにある。夢を見る張本人として、アレゴリーが縦横無尽に濶歩できる時間を超えた空間を作っているのである。ところが、第二の役割として、彼は夢の中の主人公を演じてもいるのである。この夢の中の主人公は、詩全体を通じて、無知、無学な世俗人の代表であり、尚かつ、究極の真理を求める求道者でもある。中世の、学問のない一般の人々がするように、彼は、夢の中

## *Piers Plowman*におけるWilliamの役割

服 部 久美子

### (I)

中世の夢物語は、フランスの流行をとり入れたものであるが、チョーサー、ラングランドを輩出した、中世イギリスで、一つの文学形式として、根をしっかりと定着させていることは疑いもない。チョーサーの「名声の館」の序に見られるように、中世での「夢」に対する人々の関心は、大変高いものだったようである。マクロビウスの「スキピオの夢に関する注釈」が当時良く読まれ、夢の分析に人々が興味を抱いていたことも良く知られている。「真珠」や、「農夫ピアスの夢」も当時の有名な夢物語詩であるが、文学の中に夢を使うことは、夢とは一体何であるか、という人々の疑問に答えようとしたのではなく、夢という枠をはめることで、作品の中に限定された状況を作り出そうとしたと見るべきである。夢の中では、現実が姿を消し、想像力が自由に駆使できる空間がうまれる。この、夢によって時間と空間の制約が取り除かれることが、中世夢物語の中で重要なことであり、そのうちの多くの登場人物が、アレゴリーで表現されていることも大きな特徴である。ここでは、ウィリアム・ラングランドの「農夫ピアスの夢」を取り上げ、作品の中の「夢を見る人」(‘dreamer’つまりWilliam)の役割を中心に、夢という枠組と、アレゴリーの性格を考察してみたい。

### (II)

「農夫ピアスの夢」は、当時の教会の堕落や教会関係者等の腐敗を取り扱う批判書であり、警告書であると考えるのが一般的であるが、批判するうえで、アレゴリーを用いて人物を描写し、善悪のレッテルを貼ることは、きわめて簡単なことである。

この作品の中でも、当時のアレゴリーの手法が、大変機械的に施こされている。例えば、Visioの中に出てくる、‘Holy Church」『聖教会』は、善の親玉であり、‘Lady Meed」『報酬嬢』は悪そのもののよう描かれている<sup>1)</sup>。‘Reason」『理性』は常に理性的に発言するし、‘Pride」『高慢』‘Lechery」『好色』‘Envy」『嫉妬』‘Wrath」『憤怒』‘Covetousness」『貧欲』‘Glutton」『大